

福山市立大学教育学部研究紀要 第1巻 抜刷
2013年3月発行

入所型施設の完結としてのてんかん者施設の歴史的研究

—— アメリカ合衆国てんかん者施設史研究序説 ——

中村 満紀男・岡 典子

Historical Study on the Epileptic Colony as the Complete
Model of the Institution in the United States

NAKAMURA Makio and OKA Noriko

福山市立大学教育学部

入所型施設の完結としてのてんかん者施設の歴史的研究

— アメリカ合衆国てんかん者施設史研究序説 —

中村 満紀男⁽¹⁾・岡 典子⁽²⁾

Historical Study on the Epileptic Colony as the Complete Model of the Institution in the United States

NAKAMURA Makio⁽¹⁾ and OKA Noriko⁽²⁾

The purpose of this study is to examine the significance and method for examining the historical development from the establishment of the epileptic colonies at the end of 19th century to their closure in the latter half of twentieth century. These colonies were the final stage of residential facilities for people with disabilities in the United States. After verifying that there are scant previous researches on the history of the epileptic colony, it is examined that the significance and method of our historical research are valid, and the American colonies for the epileptic are typical as the segregated institution. And, the institutions for the mentally ill and the feeble-minded are comparable with the epileptic colonies in social labeling. The annual reports issued by these colonies are good documents for revealing the life run by the epileptic in the colony, and are easily available.

Keywords : epileptic, epileptic colony, history, social labeling, United States

1. 序

(1) はじめに

本論文の目的は、20世紀転換期アメリカ合衆国（以下、アメリカ）において、障害のある子どもや成人を病院や施設に収容して保護する入所型施設、いわゆる院内保護の最終段階として完結するてんかん者施設に関する歴史的研究の序説として、研究が必要な理由と成果の見通し、研究の観点と方法、資料、対象国としてのアメリカ、今後の研究の構想の妥当性等について検討することである。

最初に、てんかん者施設史研究の必要性とその研究の現状について述べる。てんかんが病気または症状として認識されたのは古く紀元前からあったことは、医聖・ヒポクラテス（Hippocrates [英語] c. 460 BC—c. 370 BC）が「聖なる病」として命名したことに象徴される。しかし、

てんかん者の処遇が医療の対象だけでなく、社会制度として課題になったのは近代になってからであり、1863年のドイツのヴェストファーレン州ビーレフェルトに創設されたベテルの施設をてんかん専門施設の初例とする。しかし近代における障害児（者）施設あるいは学校の歴史的研究のなかで、てんかん者施設史は最も立ち後れた研究対象の一つであった。

しかし、てんかんに関連する歴史的研究が空白であったかといえば、必ずしもそうではない。むしろ、少数ながらもある程度、関心を示されてきたテーマであったといえるだろう¹⁾。てんかん史に関連する学術書が、近年、連続して刊行されている。また、2009年がてんかん研究専門誌 *Epilepsia* 刊行百年目に当たったのを記念した Hermann (2010) の論文があり、てんかん者施設を含む障害者の医

⁽¹⁾ 福山市立大学教育学部児童教育学科

⁽²⁾ 筑波大学人間総合科学研究科

療・福祉・教育施設に関するWebサイト, Asylum Projectsもある²⁾。しかし後述するように、これらの研究のテーマは、てんかん者施設の優生学運動との関連が中心となっている。本論文で提起しているてんかん者施設の創設から衰退までという施設史研究というテーマに限定すれば、その研究は空白に近いといつてよいだろう。そして通史的研究が空白であることの理由もまた、これまで問われることはなかったのである。

(2) 先行研究の整理

てんかん施設史を含むてんかん史研究にはいくつかの類型があり、疾病史、治療法史、施設史に分けることができる。最も一般的な研究はTemkin (1945; 1971) の古代以降の世界史的な通史的研究であり、テムキン (1989; 1991; 2001) は、1945年版の邦訳とその改訂の簡約版である。Friedlander (2001) の研究は近代医学から20世紀初頭までを扱っている。Eadie and Bladin (2001) の研究は、ヒポクラテス以降のてんかんに関する医学的理解に関する歴史的研究である。Scott (1993) は医学的なてんかんの治療法に焦点を当てており、Friedlander (2000) は治療のなかでも薬剤Bromide治療の盛衰を検討している。LaPlante (1993) の研究は、てんかんのなかでも側頭葉てんかんという難治性の特定病態に関する歴史的研究である。

人物研究も、てんかん(者)に関する歴史的の一つのカテゴリーである。Dasheiff (1994), Fine, Fine and Sentz (1994) およびFine, Fine, Sentz and Soria (1995) の研究は、アメリカの代表的なてんかん者施設で国内同種施設のモデルとなったニューヨーク州立クレイグ施設の初代院長, W.P. スプラトリング (William Phillip Spratling 1863-1915) らの再評価を試みた研究 (Dasheiff [1994]; Fineら [1994]) と20世紀転換期のクレイグ施設の創設・運営に直接関与した人物群に関する研究 (Fineら [1995]) である。Goodkin (2007) の研究は、アメリカてんかん協会 (American Epilepsy Society: AES) の創設者を検討しようとしている意味では人物研究であるが、学術団体の結成に関連したてんかん史研究といえる。Goldensohnら (1997) の研究は、AESの50年史である。Lipson, Montes and Devinsky (2002) は、1880-1920年の"Alienist and Neurologist"誌におけるてんかん情報を分析している (Lipson, Montes and Devinsky [2002])。

しかし、本研究の意図に最も近い先行研究として、Loofbourrow (2008), Brown and Besag (2008), Nevins (2009), 谷中邦明 (2002) の研究がある。Brown and Besagは、精神医療の観点からてんかん者施設の創設・発

展・衰退の過程を敷衍したうえで、現代的理念から改めて入所施設の必要性について検討した短編である。Nevinsは、ニュージャージー州の1888年に創設された私立バインランド精神薄弱者施設と、1898年に創設された州立てんかん者施設を、創設から優生学時代までの期間について比較検討している。

Loofbourrowと谷中の研究は、一次史料を利用した研究である。Loofbourrowは、インディアナ州立てんかん者ビレッジの約半世紀にわたる歴史をほぼ二つの時期に区分して、その変遷を追究している。谷中の研究は1892年にペンシルベニア州に開設された教会系のセント・クレメントてんかん病院の創設から1896年のペンシルベニアてんかん者病院・コロニー農場への発展過程を検討した研究である。

Loofbourrowらの四つの研究は、本格的なてんかん者施設史研究に先鞭をつけたという意味で重要である。これらの研究では、施設の創設・発展・廃止といった歴史的経過と各時点でのトピックとの関連が中心である。しかしながら、本研究が今後具体的に展開しようとする主題は重点的な内容となっていない。すなわち、施設におけるてんかん者の生活実態、てんかん者に対する教育の実施とその効果および意義、てんかん者に対する社会的位置づけの変化に関する総合的・横断的検討である。

単発の研究で参考にすべき論文がある。イギリスのてんかん者医療に25年間従事した医師, Houlder, C.A. (1977) によるてんかん者施設閉鎖に対する重大な懸念を表明した小論文は、現代の運動が施設の役割や処遇を単一の観点と方向でのみ断定する傾向があるなかで、施設の歴史的事実を正確かつ多角的に把握する意義を今後検討するうえで参考になる研究である。また、Lannon (2002) は、てんかん者コロニー創設者の意図を肯定的に評価し、その後の展開と区別している (Lannon [2002])。

以上のように、てんかん者施設史研究は、てんかん史のなかでは簡単な通史として総論的に、あるいは優生学運動との関連のように部分的に検討されただけだった。しかし1990年代になって、Fineらのような本格的なてんかん者施設史の研究が出てきたが、その数はまだ非常に少ない。

なお本論文では、障害(者)の呼称において、精神薄弱等のような歴史的表現を、必要な範囲で用いるものとする。

2. てんかんおよびてんかん者の施設史の研究対象としての意義

(1) てんかん児の改善可能性と社会的位置の変化

1) てんかんにおける改善可能性の変化

てんかん（者）に関するこれまでの歴史的な研究は、一つは、医療史・治療史の枠内で行われてきた。したがって、その研究の中心は、てんかん発作抑制のための薬剤投与の試みとその結果が中心的なテーマとなる。患者の病状や状態の改善という意味では、医師の施設長の指導のもとでの食事療法や統制された環境（たとえば医療的に管理された施設内での生活や日課）も含まれる。

これに対して本研究では、てんかん者の症状改善の努力を、以上のようなてんかんに対する医療的対処に限定せず、とりわけ広義の教育的働きかけを含めて、少なくとも理念的には統制され、支援のある環境である施設での生活と、そのてんかん者にとっての意義とを総合的に究明する研究を構想する。広義の教育的働きかけとは、てんかん者施設内では必須事業だった学校教育だけでなく、農業等への就労活動、施設職員やてんかんの居住者との接触や交流による影響・効果までを含む。また、改善とはてんかんの状態だけでなく、広く心身状態を範囲とするが、明白な変化がなくても症状の悪化の抑止まで含めることにする。さらに、改善の程度と施設や教育の役割が施設外の人々や施設の医師や教師にどのように評価されたかの必要事項である。

また、研究対象としては、てんかん者だけを抽出することなく、その類的状態だった精神病患者、とくに精神薄弱者に対する処遇およびその考え方や比較対照することで、てんかん者の処遇の独自性と意義をも究明されると考える。

ところで、Asylum Projectsのような最近の施設史研究は、反施設の立場にたつて精神病・精神薄弱とともにてんかんにも関心をもっている。その研究では、施設収容についていえば、てんかん者の状態改善や救済の創設趣旨から彼らの存在を敵視する優生学的対処まで、連続的な一貫性があったとの措置を前提としたうえで検討しているように思われる。しかし歴史的研究としての本論文の立場では、歴史の時間を逆転させて、現代の評価基準によって過去を先験的に判断するような非歴史的な研究手続きは採用しない。その理由は、歴史において存在したであろう多元的で多様な可能性と歴史的結果の過程および理由を明らかにすることが歴史的研究の趣旨であること、現代の価値基準を最善・最高とする考え方に基づく過去の裁断は、結局、優生学支配の時代と同一の思考・行動様式であり、類似の過ちに陥る懸念をもっていることによる。

2) てんかん者の社会的位置の変化

てんかん者施設史研究で最も重要な解明すべき事項は、てんかん者の社会的位置とその変化である。その理由には

三つある。第一に、てんかん者は、元来、精神病患者や精神薄弱者とは異なり、独立した治療・教育・収容対象ではなかった。アメリカでは19世紀前半になると精神病患者は治療対象となって、改善可能な病気ではない精神薄弱者が精神病院から退院となり、そのことが一因となって19世紀中葉以降に白痴学校が創設され、後の痴愚級を主な教育対象として教育が行われた。精神病患者と精神薄弱者の2つのグループから派生したのがてんかん者である。てんかん者は、精神病院や精神薄弱者施設、救貧院、監獄等におかれていたが、19世紀末になってから、てんかん者独自の治療法と処遇の方法が必要であると考えられたために、精神病患者や精神薄弱者から分離した施設創設が主張されるようになったのであった。

そこで、てんかん者施設における創設過程の究明においては、てんかんの医療的・社会的意味が時間的経過のなかで変化する可能性を考慮しつつ、いかなる社会的背景が施設設立へと導いたのか、コミュニティ生活から施設生活へと社会的位置が変わったのはどのような状態のてんかん者だったのか、その手続きはいかなるものであったのかを明らかにすることにより、創設趣旨を整理することが必要であると考えられる。

第二に、てんかん者の社会的位置は、一部の患者に限られたとはいえ、てんかん発作を抑制する顕著な効果がある薬剤の投与によって、精神病患者・精神薄弱者の類的存在から正常群に移動するという劇的な変化が生じた。この現象は、19世紀前半に狂気治療説に基づいて精神病院が治療病院として創設された時期を除けば、他に例がない。ことに1910年代以降1930年代までの優生学運動最盛期において、薬剤等によっててんかん発作が抑制された一部のてんかん者は、優生学運動の主たる標的となったメンタル・グループ（精神病患者・精神薄弱者・てんかん者）から離脱し、市民としてコミュニティで通常の生活を送ることが可能となったのである。

てんかん者のこの社会的位置の劇的な変化は、通常的生活回復という限定的なものではない。治療可能による正常性の維持・回復と社会的排除＝施設内隔離・拘束からの解放はもとより重要であるが、類的存在の間で共通だった社会的脅威という社会的ラベル＝スティグマが、コミュニティ生活が可能となった一部のてんかん者からは抹消されることになるのである。このような社会的位置の変化によって、新たなてんかん者像は形成されていくのであろうか。

しかしながら同時に、改善されず、施設に留まった多くのてんかん者は類的存在から完全に離脱することができずに、中間的位置を保持したままであったことも、考慮に入

れておく必要がある。その理由はてんかん独特の症状・状態にあらう。てんかんは、てんかん発症前の正常性とその部分的残存、てんかん発症・進行と精神薄弱・精神病への近接または精神薄弱・精神病との併存において、精神病・精神薄弱との症状・状態における連続性と不連続性があったからである。

第三に、一部のてんかん児は、服薬によっててんかん発作が軽減あるいは抑止され、それまでの通常のコースであった隔離施設への入所、施設での医療・保護対象から、他の子どもと同じように、通常のコミュニティに居住し、自宅から公立学校に通学する教育対象となり、社会的地位が昇格するようになる。大都市の教育当局では特殊教育分野が学校教育の一分野として確立されるなかで、医療の改善によるてんかんの軽減・抑止とてんかん児の社会的地位の変化によってどのような対応をしたのかについても検討する必要がある。

3) 入所型施設の完結としてのてんかん者施設の破綻

この観点からのまとまった研究は見あたらない。障害児の入所型施設は、貧困問題とその改善を基本条件としながら、時代のニーズと各分野の指導者の新しい理念に従って、その機能を変えてきた。まず聾唖児や盲児においては聾唖院と盲院という慈善的な教育保護から聾唖学校と盲学校という学校教育へ脱皮するが、精神病患者および精神薄弱者は、異なる過程を辿る。精神病患者では、保護施設→治療病院→治療機能の縮小と保護施設の大規模化へと展開する。精神薄弱者もほぼ同じ図式である。精神薄弱者では、学校教育→収容機能の部分的装備→大規模・隔離化である。肢体不自由児では、保護施設から治療と教育のための病院附設の学校へと展開するという独自の展開があった。

これらの展開のなかでてんかん者施設は、大規模施設が開設された時期が社会事業施設体系としては最後の時期であり、機能においては障害者の入所が当事者にも設置主体にも最善であるとする精神病患者と精神薄弱者の処遇にみられた考え方を完結するものである。しかし同時に、てんかん者施設は、数千人の入所者、広大な土地と建物、多数の従事者、多様な機能、隔離という画一的な運営方針によって、大規模・隔離施設が、財政的・機能的・理念的に破綻する段階に位置することになる。

(2) 研究対象としてのアメリカ合衆国の妥当性

本研究ではアメリカのてんかん者施設を念頭においているのであるが、それには妥当性があるのだろうか。19世紀末には、すでにドイツのベテル施設やフランスのてんかん

者施設があり、イギリスやデンマークでも精神薄弱者施設内においててんかん者の保護が具体化に検討されていた。これらの動向がアメリカのてんかん者施設創設に影響を与えたことは、時期的にも資料的にも明らかである (Drewry [1896]; Ewart [1892]; Jensen [1899]; Peterson [1887]; Peterson [1889]; Sellers [1893]; Shanahan [1928])。しかしドイツのベテル施設情報は、各国にとってモデルの一つとしての位置づけに留まっていた。

これに対して、アメリカのてんかん者施設には、ベテル施設史とは異なる、より普遍的な研究上の意義がある。ベテル施設は、極言すればベテル施設だけにみられた、より一般化が困難な特異な社会的・福祉的事象であったといえる。いいかえれば、海外からの参観者には印象が強く、賛辞が多くても、他の国では導入が困難な先例であった。アメリカのてんかん者施設は、巨費を投じて広大な土地に立地し、多数の建物を建設する大規模施設を志向しているために、教育・福祉モデルとして導入や模倣が困難という点でベテル施設と類似しているが、その社会的意義という点では、以下に述べるように、ベテル施設とは比較にならないほどの多義的な意義をもっていたために、影響力ではベテル施設とは格段の差があったと考えられる。

第一は、アメリカでは大規模・隔離という世界で最も体系的な施設制度をすでに19世紀後半から、精神病患者と精神薄弱者を対象に展開しており、てんかん者施設はその展開であったこと、第二に、てんかん者施設創設の理由が創設時の人道主義的な根拠から移動した社会の保護論が中心となり、20世紀初頭には優生学運動の有力な支持基盤となること、第三に、広義の医療によるてんかんの改善可能説がてんかん者施設の社会的根拠と相互関連を深めていくこと、第四に、入所型施設の成立から展開においてアメリカはその典型であったことである。しかも、入所型施設は、貧困問題と関連していたことから州当局が中心的な役割をもっており、公的社会事業として、きわめて公共性の高い事業であった。第五に、アメリカのてんかん者施設は、他の公的施設と同じように、事業の理念と成果を示す年次報告のような体系的な逐次資料が整備されていることである。これらの資料は、現在、関係図書館に所蔵、あるいはPDF版資料として市販されている。

(3) 研究と分析の視点

1) 創設構想と対象者情報

てんかん者施設は他の障害児(者)の施設や学校と同様に、その創設が最初から支持されたわけではなかった。多額の経費を要する州立施設を創設するには、その趣旨が社

会や州当局に説得力をもち、社会的に是認されることが必要であったから、その理由と背景を正確に把握する必要があるし、創設法案が否認される場合にはその過程と理由を検討する必要がある。いずれの場合でも、施設入所が想定された対象者の症状・程度、入所者の男女別数、年齢とその変化に関する情報を得る必要がある。

この創設初期の対象者情報は、一般に偏っている場合が多い。その理由の一つは、当初は、施設側の臨床的・医学的・教育的経験が浅いために標的とする障害全体の情報が少ないためである。第二の理由は、創設構想において、施設の創設と維持が目的であるために、施設設置による効果がより顕著な状態が強調されるからである。すなわち、教育・医療・施設収容の効果や経済性が高いこと、あるいは逆に院外での放置または救済は本人と社会の双方に有害で、施設収容はそのような問題を解消することが、一般に強調される傾向がある。これらの情報の偏りは、逐次的な情報または関連雑誌等の情報によって補正される必要がある。

2) 処遇の理念・目的・内容・方法

これらの項目は、施設の理念・設置目的と機能を知るうえで必要な情報である。目的はスタッフや医療関係の施設・設備の整備と密接に関連するので、当初の構想通りに実行されるとは限らず、その構想がどのように実施されているのかをみるには、薬剤投与等の医療と教育と生活の内容が実態的に検討される必要がある。これらの項目は、年次報告には必ず記載される主要事項である。上述したように、創設当初のほうが医療・生活・教育等の処遇効果が楽観的であったが、その理由は、従来の処遇にとってかわる新しい医療的・教育的処遇の導入が、施設創設の前提であったこと、設置者である州や州議会、あるいは経営責任者である理事会に対する、運営実務者としての施設長の自己正当性の証拠でもあったこと、放置された以前の状態よりも、施設における統制された環境での処遇のほうが、何らかの改善効果を生んだであろうことによる。そのような文脈を考慮して、本項目は検討する必要がある。

3) 施設の成果と理念および機能の変化との相互関連

19世紀末においててんかん者施設が創設された時点での施設目的=保護と、類的存在としての精神病患者と精神薄弱者の施設目的=隔離では、施設の成果も理念も異なる。したがって、施設に要求される機能も異なることになる。一般に、施設の成果が当初の予測通りに達成されたか、あるいは予測以下であったかが明瞭に認識されるようになる創設後約10年前後に、楽観的な成果の修正が施設や学校では

行われることが多い。このような成果の予測の変更とその理由も、年次報告記載の情報によって分かることが多い。とくにてんかん者施設における注目すべき事項は、投薬の効果が明瞭になった時期の前と後の処遇内容の変化、てんかんの発症・進行と精神薄弱・精神病への近接または精神薄弱・精神病との併存、てんかんの進行または改善による心身の連続性と不連続である。

4) てんかん者施設間の比較検討による総合的観点

アメリカにおけるてんかん者施設の開設を時間的に整理したのが、Table 1である。

Table 1 および補足情報から、以下のように整理できる。アメリカの州立てんかん者施設は、オハイオ州ギャリア郡の中心地ギャリポリスで1893年11月30日に開業したてんかん者病院を初例とする。しかし、この最初のてんかん者州立施設が創設されるまでには、創設の提案から20年以上を要している。1868年に州慈善委員会が貧困てんかん者問題の改善を人道的な処遇=専門施設創設として問題提起したが (Clark [1926] 793; Drewry [1896] 121)、それが結実したのは、1891年の州議会における施設建設資金の支出可決においてであった。オハイオ州立施設の開業する前年の1892年にはペンシルベニア州で私立施設が開設された。それ以降、州立施設が1894年のニューヨーク州、1897年のミズーリ州、1898年のマサチューセッツ州、ニュージャージー州と設立されていく。

1920年代には、てんかん者専門施設がマサチューセッツ (2施設)、ニュージャージー、インディアナ、ミシガン、オハイオ、ミズーリ、テキサス、キャンザスの各州で、精神薄弱者施設にてんかん者専用棟がバージニア、コネチカット、アイオワ、ミズーリ州で開設されるに至る (Clark [1926] 797; Shanahan [1928])。これらの施設のなかには、小規模な私立施設が含まれている。また、19世紀末の精神薄弱者施設や精神病院において、てんかんのある入所者に対する独自のニーズの認識は一般的であったから、専用棟が開設されていない場合でも、てんかん者には何らかの独自の対応をしていたと思われる。

以上のように、てんかん者施設の創設計画を中心とする各州における対応を、可能な限り横断的に検討することが必要となる。また、横断的な検討という場合、経営形態の異なる私立てんかん者施設や類的施設、とくに精神薄弱者施設との比較検討が必要である。とりわけ、てんかん者施設が創設された時代は、精神薄弱者施設の大規模・隔離化の方針が確立しており、20世紀初頭になると、精神薄弱者

Table 1 1920年代までのアメリカ合衆国におけるてんかん者施設の開設

時期	州および関係機関	内 容
1868	マサチューセッツ州	ベアリーの私立精神薄弱施設で、てんかん治療の試み
1874	ニューヨーク州	州狂気委員会、州議会にてんかん者病院創設を勧告
1876	オハイオ州慈善委員会	てんかん者の州によるケアを勧告
1882	マサチューセッツ州	ボールドウィンズビルに、慈善による私立てんかん者施設として9人の患者で開設
1891	オハイオ州	州議会、てんかん者・てんかん性狂人アサイラム建設のために4万ドル支出決定。委員長Brinkerhoff将軍はこの高貴な慈善の最大の功績者。てんかん者のニーズを州当局に認識させた
		11.21, オハイオ州立てんかん者病院、定礎式
1892	ペンシルベニア州	セント・クレメントてんかん者病院創設。1896年にオークボーンのペンシルベニアてんかん病院・農業コロニーに発展、ペンシルベニア州セント・クレメントてんかん者病院と改称
1893	オハイオ州	11.30, アメリカ最初の州立てんかん者病院、ギャリボリスに開設。州内の貧しいてんかん者対象、患者用の36棟、多数の作業所を設置し、できるだけ実際の職業・教育訓練の機会用意。まもなくより広い土地が購入され、収容者の雇用機会を拡大、施設には必要なすべての野菜と果実等を供給。すでに9病棟が完成し、500人が居住。彼らは、ケア、適切な食事療法、体系的な医療、改善された衛生的環境、規則正しい労働と運動の下で改善。そのすべてを彼らは毎日得ている。医療は、経験ある医師による。
1896	ニューヨーク州	1.27, ソニアにクレイグ・コロニー開設。1892年の敷地選択法以降の努力。施設の目的は、十分な水と健康によい肥沃で広大な土地で、精神病のてんかんを除外して、人道的・治療的・科学的・経済的な処遇とケアを確保することを目的（学校・教育を含む）。
1897	ミズーリ州	6, マーシャルに州立精神薄弱者・てんかん者施設を開設、受け入れ開始
1898	マサチューセッツ州	パーマーに州立マンソンてんかん者病院開設
	ニュージャージー州	11.1, スキルマンにてんかん者施設開設
1904	テキサス州	アビリーンに州立てんかん者コロニー開設
1905	インディアナ州	ニューキャッスルに州立てんかん者施設設置、1907年受け入れ。
1908	オレゴン州	12.1, セイラムに州立精神薄弱者施設開設。精神薄弱・白痴・てんかん者の訓練・ケア・保護を目的
1910	バージニア州	マディソン・ハイツに州立てんかん者施設設置、1911年受け入れ。
1920年代後半		てんかん者専門施設が、マサチューセッツ州（2）、ニュージャージー州、インディアナ州、ミシガン州、オハイオ州、ミズーリ州、テキサス州、キャンザス州、精神薄弱者てんかん棟がバージニア州、コネチカット州、アイオワ州、ミズーリ州で開設

出典：Clark; Drewry; Friedlander; Letchworth (1900); Letchworth (1901); 中村 (1987); Shanahan; 谷中 (2002)

は優生学運動の主要な標的となり、精神薄弱者施設は優生学志向の施設長により運営されるようになるからである。

ところで、てんかん者施設は、同時代の動向と完全に軌を一にして運営されたのであろうか。というのは、すでに述べたように、てんかん者は精神薄弱者・精神病患者と連続性と不連続性をもっており、また投薬の効果により、正常性を回復し、それを維持するてんかん者の場合、精神薄弱者と同じ施設における終生拘束や優生断種の対象になったのかどうかも慎重に検討する必要があるからである。さらに、投薬の効果によるてんかんの状態像が改善された場合、公立学校での教育問題とも連動する。てんかん者施設における教育概念の変化とともに、公立学校でのてんかん児の扱いについても検討する必要がある。以上のように、てんかんが精神疾患および精神薄弱との類縁関係にあったてん

かん者の独自性に留意しながら、精神薄弱者施設史と優生学史の研究成果も視野に入れておく必要がある。

5) 類的存在としての精神薄弱等との比較検討

アメリカで障害のある子どもの教育が社会的な課題になる場合、貧困、改善方法としての教育、成果の評価とその社会的根拠、コミュニティまたは施設という生活の場が一連のサイクルとして展開されてきた。障害児の教育の基本的な基盤として貧困問題があり、その改善・解決方法として居住や食事の救済（だけ）ではなく職業教育による自立が構想される。それが成功すると、教育概念が拡大するとともに権利によって担保されるようになり、社会自立が目ざされ、障害者のなかには市民としての地位を獲得し、コミュニティで生活するよう人々も出現する。しかし、予測

以上に教育成果が上がらないと、生活の場はコミュニティではない保護的な施設が設定される。同時に、非社会的ないし反社会的な障害特性に関する言説が流布する。

教育（治療）効果と生活の場および社会的位置に関する以上の説明において、後半部分は、精神病と精神薄弱を中心とするメンタル・グループに関連するものであり、前半部分は聾啞や盲を主とする非メンタル・グループで観察された状況であり、歴史的にはきわめて対照的な経過を辿ったことになる。今後の研究では、非精神障害群との比較も念頭にはあるが、てんかんととりわけ類縁関係にある精神病と精神薄弱との比較を重視する。精神病と精神薄弱との関係は、つねに前者は後者の前走者であった。治療・教育の効果が高いとみなされる段階では病院・学校が推進され、改善可能性が低く社会的な有害性が主張される段階では保護施設へと転換し、そして優生学運動では主要な標的となり、1930年代になると施設政策破綻におけるコミュニティ生活が模索されるという展開において、精神病患者はつねに精神薄弱者の先例であった。

このような類的関係者の軌跡を背景にして、てんかん者の場合は、薬剤の服用による治療効果、処遇内容、生活の場と社会的位置という要素を得て、どのような展開を示すのであろうか。同時代の精神薄弱者施設に貫徹していた自給自足とそのための職業訓練、快適な施設生活という施設運営の考え方は、てんかん者施設にはどのように適用されるのか、創設時に限られた考え方なのか、今後追究されなければならない。

6) 社会的ラベルの変化

19世紀中葉において、教育可能とみなされるようになった白痴は保護対象から学校での教育対象となった。しかし彼らの教育成果は、非メンタル・グループ＝聾啞児・盲児との比較から貧困問題改善への有効手段とはなりえないとして失敗と見なされた。聾啞児・盲児では成功した権利としての教育論を白痴児に援用したものの、社会的に認容されなかった。そのために白痴の教育の意義は限定され、同時に生活の場は、競争的なコミュニティではなく保護的な施設が適切とみなされるようになり、その結果、彼らは二級市民としての地位を甘受せざるを得なくなる。さらに、優生学運動の進展により、彼らの社会的存在自体が問題となり、優生断種の主要な対象となる。改善可能性が限定されていたてんかん者は、抗てんかん剤によって改善への期待が高まることにより、メンタル・グループから離脱できたのであろうか、また、彼らの社会的脅威性は消失するのであろうか。

てんかんに付与された社会的ラベルの点で20世紀半ばに生まれた新しい現象は、公立学校におけるてんかんの教育問題だった。そもそもてんかん者の教育は、施設においても一貫して重視されていた（Spratling [1903] 62; Clark [1926] 798; Shanahan [1928]）。公立学校でてんかんの教育が問題になるのは、1930年代半ば以降のようである³⁾。ミシガン州アトロイト公立学校が全米で初めて公立学校にてんかん児特別学校を設置した1935年以降である。同市公立学校では、1947年6月までに765人のてんかん児を組織的に教育した（Tenny [1955] 162）。

公立学校におけるてんかん児の教育は、単なる教育機会の拡大ではない。公立学校という一般の社会制度において教育を享受することに意味があるといえる。また、てんかん（児）をめぐる社会的位置が、社会的な排除の対象ないしは周縁群から正常群に変化する可能性を示している。さらに重要なことに、これまでの障害児の教育が基本的には貧困層の問題であったのに対して、てんかん児はより広い階層に属しており、貧困層や社会下層に集中しているわけではなかった（Tenny [1955] 164）。このことは、親から公立学校に対する教育要求が顕在化したことを示唆する。また、学齢期のてんかん児と彼らがおかれた社会的条件がデータによって示されるようになったことも重要である。教育形態は、特別学校（ミシガン州バトル・クリーク、ロサンジェルス）だけでなく、通常教育（ニューヨーク、ポルティモア）、家庭教育とさまざまではあったが、てんかん児の教育が施設だけでなく、公立学校制度においても実施されるようになった（Tenny [1955] 167; Board of Education of the City of New York [1941] 17-20）。このことは、てんかん児の教育問題が特殊教育の範疇の一部に加入するようになったことを意味する。

7) 資料と検討対象の施設

てんかん者施設の年次報告の意義と入手可能性についてはすでに述べたが、大規模・隔離からその破綻という経過を示す典型的施設を選択したうえで、併せて年次報告の整備、資料選択の恣意性の回避、資料の体系的確保、州間および他障害における比較対象の設定上の理由を考慮する必要がある。その意味で、検討する対象として妥当なてんかん者施設とその特徴は、以下の通りである。

オハイオ州立てんかん者施設 アメリカ最初の州立てんかん者施設

ニューヨーク州立クレイグ・コロニー アメリカを代表するてんかん者コロニー

セント・クレメントてんかん者病院 アメリカ最初のてんかん者施設でキリスト教社会事業として開設

イースタン・ペンシルベニア州立てんかん者施設 上記の同州の私立施設と比較

バージニア・テキサス・ニュージャージーの州立てんかん者施設 優生学運動が盛んな州

インディアナ州立てんかん者施設 その他の地域のてんかん者施設

ミズーリ州立精神薄弱者・てんかん施設 精神薄弱者施設を兼ねるてんかん者施設

他の障害との比較については、これまで蓄積されてきた研究成果に基づくこととする。精神薄弱者施設史については、Scheerenberger (1983), タイオア・ベル (1988), トレント (1997) があり、上記のてんかん者施設を開設した州に対応する施設年次報告も、ほぼ収集済みである。精神病院史については、脱施設化運動と病院閉鎖の後に盛んになった資料保存の一環として、歴史ある精神病院の歴史研究文書がつぎつぎと公刊されている。刊行順に代表的な著作をあげれば、Scull (2005), Geller (2006), Callaway (2007), Penney and Stastney (2009) がある。Scullの著書にはかつて彼が1981年に、精神医学は人道主義か抑圧かを問うた論文が再録されており、Gellerは東海岸諸州の古い私立精神病院、Callawayはマサチューセッツ州立ウースター精神病院、Penney and Stastneyはニューヨーク州立精神病患者保護施設の歴史を主題としている。

てんかんおよびてんかん者の状況は、上記のてんかん者施設の年次報告だけでは把握できない。そこで、てんかん者の救済施設での処遇が問題となり、その改善・解決が議論される場として、全国慈善矯正会議 (NCCC: National Conference of Charities and Correction: 1874年の公的慈善会議から1884年に改称) があった。この会議において、19世紀末に障害児の教育問題や障害者の処遇問題が、精神病医およびてんかん者の保護・医療に関心をもつ人々によって協議されたのである。1890年代はじめに、てんかん者の専門施設が念願かなって設立され、具体的に運営されはじめる1898年5月、施設長の医師を中心に、全国てんかん研究協会 (National Association for the Study of Epilepsy and the Care and Treatment of Epileptics) がニューヨークで結成され、一堂に会して研究発表や討議することで、相互に影響しあう場が生まれた。いずれの組織も、会議録を公刊している。これらの資料も利用する。

3. 結 語

小論は、アメリカのてんかん者施設史研究序説として、今後の研究を展開する前提として、先行研究を参照しつつ、研究上の意義と研究方法を検討した。社会的排除の典型の一群としてのてんかん者は、精神薄弱者や精神病患者の類的存在でありながら、その独自のニーズに対応した保護の処遇が提供されるのが最も遅かった人々である。てんかん治療に効果のある薬剤の開発によって、状態が改善されたてんかん者は、類的存在から離脱し、通常のコミュニティで生活することになる。その事実が、施設内に残されたてんかん者の処遇にも影響を与えたはずである。放置から保護、そして部分的な解放という劇的な経過を辿ったてんかん者に対する処遇全体を社会的排除という一元的な論理ですべての障害者処遇を理解することは、歴史的事実に反するうえに、てんかん者の社会への参加を促進するうえでの契機を不明確にすると考える。今後は、資料と歴史的な状況に基づいて、アメリカてんかん者施設史研究を具体的に展開することとしたい。

付 記

本論文は、日本学術振興会科学研究費補助金「日本障害児教育史研究の批判的・総合的検討による教育史像の革新と現代的意義」(平成23-26年度基盤 (B), 研究代表者・中村満紀男) の研究成果の一部である。

註

- 1) 研究として公表された文献が少ないことが、てんかん (者) の歴史的研究に対する関心が乏しいことを意味するとは限らない。廃止された多くの精神薄弱者・精神病患者・てんかん者の施設を含めて、病院・施設関係の写真を含む歴史的情報を一種の遺産として今後の改善のために保存し、公表しようとするアメリカの全国ならびに地方の運動は、日本よりもはるかに強力なように思われる。その一つが、Asylum Projectsである。このほかに、州単位・施設単位のローカルなプロジェクトもある。
- 2) http://www.asylumprojects.org/index.php?title=Main_Page
- 3) 1906年秋に、オハイオ州クリーブランド公立学校にてんかん児の特別学校が開設され、1人の教師のもとで10人前後の生徒が通学した。この学校は、小学校の構内の別棟に、てんかん発作が他の生徒に与える悪影響を回避するために開設されたが、てんかん児にとっての意義をも見いだそうとしていた (Graves [1912])。詳細は、別の機会に触れたい。

文 献

- The Board of Education of the City of New York (1941) The Committee for the Study of the Care and Education of Physically Handicapped Children in the Public Schools of the City of New York Report of the Sub-Committee on Epileptic Children. The Board of Education of the City of New York.
- Brown, S.W. and Besag, F.M.C. (2008) Psychiatry and Residential Care. Engel, Jr., J. and Pedley, T.A. (eds.) *Epilepsy A Comprehensive Textbook* (2nd edition) , 3, 2209-2214.
- Callaway, E. (2007) *Asylum A Mid-Century Madhouse and Its Lessons about Our Mentally Ill Today*. Westport, Conn.: Praeger Publishers.
- Clark, L. P. (1926) Public and Private Provision for the Epileptic. *Mental Hygiene*, 10, 787-803.
- Dasheiff, R.M. (1994) The First American Epileptologists: William P. Spratling, MD and Roswell Park, MD. *Neurology*, 44, 171-174.
- Drewry, W. F. (1896) State Provision for Epileptic. *Charities Review*, 5, 117-122.
- Eadie, M. J. and Bladin, P. F. (2001) *A Disease Once Sacred: A History of the Medical Understanding of Epilepsy*. Paris: John Libbey Eurotext.
- Ewart, C.T. (1892) Epileptic Colonies. *Journal of Mental Science*, 38, 212-222.
- Fine, E. J., Fine, D. L., and Sentz, L. (1994) The Importance of Spratling. *Archives of Neurology*, 51, 82-86.
- Fine, E. J., Fine, D. L., Sentz, L., and Soria, E. D. (1995) Contributions of the Founders of Craig Colony to Epileptology and Public Care of Epileptics: 1890-1915. *Journal of the History of the Neurosciences*, 4 (2), 77-100.
- Friedlander, W. J. (2000) The Rise and Fall of Bromide Therapy in Epilepsy. *Archives of Neurology*, 57, 1782-1785.
- Friedlander, W.J. (2001) *The History of Modern Epilepsy The Beginning, 1865-1914*. Westport, CT: Greenwood Press.
- Geller, J.L. (2006) A History of Private Psychiatric Hospitals in the USA: From Start to Almost Finished. *Psychiatric Quarterly*, 77 (1), 1-41.
- Goldensohn, E.S., Porter, R.J., and Schwartzscroin, P.A. (1997) The American Epilepsy Society: An Historic Perspective on 50 Years of Advances in Research. *Epilepsia*, 38 (1), 124-150.
- Goodkin, H.P. (2007) The Founding of the American Epilepsy Society: 1936-1971. *Epilepsia*, 48 (1) . 15-22.
- Graves, William C. (1912) Report on the Care of Epileptics in Special Institutions in the United States. *Epilepsia*, A3, 2, 162-177.
- Hermann, B. (2010) 100 years of Epilepsia: Landmark Papers and Their Influence in Neuropsychology and Neuropsychiatry. 2010, 1-13.
- Houlder, C.A. (1977) Closure of a Hospital and Some People with Epilepsy. *British Journal of Medicine*, 14 May 1977, 1266-1267.
- Jensen, B. (1899) The Care of Epileptics in Denmark. Translation and Remarks. *Journal of Psycho-Asthenics*, 4 (2), 69-72.
- Lannon, S.L. (2002) Free Standing: Social Control and the Sane Epileptic, 1850-1950. *Archives of Neurology*, 59, 1031-1036.
- LaPlante, E. (1993) *Seized: Temporal Lobe Epilepsy as a Medical, Historical, and Artistic Phenomenon*. New York: HarperCollins.
- Letchworth, W. P. (1900) *Care and Treatment of Epileptics*. New York and London: G.P. Putnam's Sons.
- Letchworth, W. P. (1901) Transactions of the National Association for the Study of Epilepsy and the Care and Treatment of Epileptics, at the First Annual Meeting, held in Washington, D.C. May 14-15 1901.
- Lipson, S.E., Montes, J.E. and Devinsky, O. (2002) Epilepsy in the Alienist and Neurologist, 1880-1920. *Epilepsia*, 43 (8), 912-919.
- Loofbourrow, R.L. (2008) *The Indiana Village for Epileptics, 1907-1952: The Van Nuys Years*. Master of Arts in the Department of History of Indiana University. <https://scholarworks.iupui.edu/handle/1805/1868> (2012.10.9アクセス)
- 中村満紀男 (1987) *アメリカ合衆国障害児学校史の研究*. 風間書房.
- Nevins, M. (2009) *A Tale of Two "Villages": Vineland and Skillman, NJ. The Unknown Story of New Jersey's Major Role*. Bloomington, IN: iUniverse.
- Peterson, F. (1887) The Epileptic Colony at Bielefeld. *Medical Record*, April 23, 1887, 463-464.
- Peterson, F. (1889) The Colonization of Epileptics. *Journal of Mental & Nervous Disease*, 14 (12), 753-763.
- Penney, D. and Stastney, P. (2009) *The Lives They Left Behind: Suitcases A State Hospital Attic*. New York: Bellevue Literary Press.

Scheerenberger, R.C. (1983) A History of Mental Retardation. Baltimore: Paul H. Brooks.

Scott, D.F. (1993) The History of Epileptic Therapy, An Account of How Medication Was Developed. Lancashire and New York: Parthenon Publishing Group.

Scull, A. (2005) A Tragic Tale of Megalomania and Modern Medicine. New Haven: Yale University Press.

Sellers, E. (1893) A Story of A Colony for Epileptics. Popular Science Monthly ,1893/3, 662-671.

Shanahan, W.T. (1928) History of the Development of Special Institutions for Epileptics in the United States. Psychiatric Quarterly, 2 (4), 422-434.

Spratling, W.P. (1903) An Ideal Colony for Epileptics. Proceedings of National Conference of Charities and Correction, 30, 259-71.

Temkin, O. (1945) The Falling Sickness: History of Epilepsy from the Greeks to the Beginnings of Modern Neurology. Baltimore : Johns Hopkins University Press.

Temkin, O. (1971) The Falling Sickness: A History of Epilepsy from the Greeks to the Beginnings of Modern Neurology. Baltimore: Johns Hopkins University Press. テムキン, O. 和田豊治訳 (1989, 1991) てんかんの歴史 (1) (2). 中央洋書出版部. テムキン, O. 和田豊治抄訳 (2001) てんかん病 医史抄—古代より現代神経学の夜明けまで. 医学書院.

Tenny, J.W. (1955) Epileptic Children in Detroit's Special School Program. Exceptional Children, 21, 162-167.

トレント, Jr. , J. W. 清水貞夫ほか訳 (1997) 「精神薄弱」の誕生と変貌—アメリカにおける精神遅滞の歴史— (上・下). 学苑社. Trent, Jr., J. W. (1995) Inventing the Feeble Mind: A History of Mental Retardation in the United States. Berkeley: University of California Press.

タイオア, P.L.・ベル, L.V. 清水貞夫ほか訳 (1988) 精神薄弱者とコミュニティーその歴史—. 相川書房. Tyor, P.L. and Bell, L.V. (1984) Caring for the Retarded in America. Westport, Conn.: Greenwood Press.

谷中邦明 (2002) 世紀転換期のアメリカ合衆国における初期てんかん施設に関する研究. 2002年度筑波大学修士論文.

(2012年11月20日受稿, 2012年11月30日受理)